

青ひげ

ペロー Perrault

楠山正雄訳

青空文庫

むかしむかし、町といなかに、大きなやしきをかまえて、金の盆ぼんと銀のお皿さらをもつて、きれいなお飾りかざりとぬいはくのある、いす、つくえと、それに、総そうきん金ぬりの馬車までももっている男がありました。こんなしあわせな身分でしたけれど、ただひとつ、運のわるいことは、おそろしい青ひげをはやしていることで、それはどこのおくさんでも、むすめさんでも、この男の顔を見て、あつといつて、逃げ出さないものはありませんでした。

さて、この男のやしき近くに、身分のいい奥おくさんがあつて、ふ

たり、美しいむすめさんをもっていました。この男は、このむすめさんのうちどちらでもいいから、ひとり、およめさんにもraitたいといって、たびたび、この奥さんをせめました。けれど、ふたりがふたりとも、むすめたちは、この男を、それはそれはきらつていて、逃げまわってばかりいました。なにしろ青ひげをはやした男なんか、考えただけでも、ぞつとするくらいですし、それに、胸のわるいほどこいなことには、この男は、まえからも、いく人か奥さまをもっていて、しかもそれがひとりのこらず、どこへどう行ってしまったか、ゆくえが分からなくなっていることでした。

そこで、青ひげは、これは、このむすめさん親子のごきげんを

とつて、じぶんがすきになるようにしむけることが、なによりちか道だと考えました。そこで、あるとき、親子と、そのほか近きんじ所で知よりあいの若い人たちをおおぜい、いなかのやしきにまねいて、一週しゅうかん間あまりもとめて、ありつたけのもてなしぶりをみせました。

それは、まい日、まい日、野あそびに出る、狩かりに行く、釣つりをする、ダンスの会だの、夜会やかいだの、お茶の会だのと、目のまわるよくなせわしきでした。夜よるになつても、たれもねどこにはいろいろとするものもありません。宵よいがすぎても、夜中がすぎても、みんなそこでもここでも、おしやべりをして、わらいさざめいて、ふざけっこしたり、歌をうたいあつたり、それはそれは、にぎやかな

ことでした。とうとうこんなことで、なにもかも、とんとんびよ
うしにうまくはこんで、すえの妹のほうがまず、このやしきの主
人のひげを、もうそんなに青くは思わないようになり、おまけに、
りっぱな、礼儀^{れいぎ}ただしい紳士^{しんし}だとまでおもうようになりました。
さて、うちへかえるとまもなく、ご婚^{こん}礼^{れい}の式がすみしました。

それから、ひと月ばかりたったのちのことでした。

青ひげは、ある日、奥^{おく}がたにむかつて、これから、あるたいせ
つな用むきで、どうしても六^{しゅう}週^{かん}間、いなかへ旅をしてこなけ
ればならない。そのかわり、るすのあいだの気ばらしに、お友だ
ちや知りあいの人たちを、やしきに呼んで、里の家^{さと}にいたじぶん

とおなじように、おもしろおかしく遊んで、くらしでもかまわな
いから、といいました。

「さて、」と、そのあとで、青ひげは奥がたにいいました。「こ
れはふたつとも、わたしのいちばん大事な道具だいじ どうぐのはいつている大
おとだな
戸棚のかぎだ。これはふだん使わない金銀の皿を入れた戸棚の
かぎだ。これは金貨きんかと銀貨をいっぱい入れた金庫きんこのかぎだ。これ
は宝ほう石箱せきのかぎだ。これはへやのこらずの合いかぎだ。さて、
ここにもうひとつ、ちいさなかぎがあるが、これは地下室ちかしつの大ろ
うかの、いちばん奥おくにある、小べやをあけるかぎだ。戸棚という
戸棚、へやというへやは、どれをあけてみることも、中にはいつ
てみることも、おまえの勝手かってだが、ただひとつ、この小べやだけ

は、けっしてあけてみることも、まして、はいつてみることはならないぞ。これはかたく止めておく。万一にもそれにそむけば、おれはおこつて、なにをするか分からないぞ。」

奥がたは、おいつけのとおり、かならず守りますと、やくそくしました。やがて青ひげは、奥がたにやさしくせつぷんして、四輪馬車に乗つて、旅だつて行きました。

二

すると、おくがたの知りあいや、お友だちは、お使を待つまも、もどかしがつて、われさきにあつまつて来ました。およめ入りさ

きの、りっぱな住まいのようすが、どんなだか、どのくらい、みんなは見たがつっていたでしょう。ただ主人がうちにいるときは、れの青ひげがこわくて、たれも寄りつけなかったのでございませす。

みんなは、居間いま、客間きやくま、大広間から、小ベヤ、衣裳いしようベヤと、片っぱしから見てあるきました。が、いよいよ奥ぶかく見て行くほど、だんだんりっぱにも、きれいにもなっていくようでした。

とうとうおしまいにも、いっばい家具かぐのつまった、大きなへやに来ました。そのなかの道具どうぐやおきものは、このやしきのうちでも、一等級りっぱなものでした。かべかけでも、ねだいでも、長いすでも、たんすでも、つくえや、いすでも、頭かぶのてっぺんから、足の

爪つまさきまでうつるすがたみでも、それはむやみにたくさんあつて、むやみにぴかぴか光つて、きれいなので、たれもかれも、ただもう、かんしんして、ふうと、ため息をつくだけでした。すがたみのなかには、水すい晶しょうのふちのついたものもありました。金銀めつきのふちのついたものもありました。なにもかも、この上もなくけつこうずくめなものばかりでした。

お客たちは、まさかこれほどまでもおもわなかつた、お友だちの運のよさに、いまさら感心したり、うらやましがったり、いつまでもはてしがありませんでしたが、ご主人の奥がたは、いくらりっぱなおへやや、かざりつけを見てあるいても、じれったいばかりで、いつこうにおもしろくも楽しくもありませんでした。

それというのが、^{おつと}夫が出がけにきびしくいいつけておいていった、地下室のひみつの小べやというのが、しじゅう、どうも気になつて気になつて、ならないからでございます。

いけないというものは、とかく見たいのが、人間のくせですから、そのうちいよいよ、がまんがしきれなくなつてくると、この奥^{おく}がたは、もうお客にたいして、失^{しつれい}礼のなんのということをおもつてはいられなくなつて、ひとりそつと裏^{うら}ばしごをおりて、二ども三ども、首の骨がおれたかとおもうほど、はげしく、柱や梁^{はり}にぶつかりながら、むちゅうでかけ出して行きました。

でも、いよいよ小べやの戸の前に立つてみると、さすがに夫^{おつと}のきびしいいつけを、はつとおもい出しました。それにそむいた

ら、どんなふしあわせな目にあうかしのれない、そうおもつて、しばらくためられました。でも、さそいの手が、ぐんぐんつよくひつぱるので、それをはらいきることは、できませんでした。そこで、ちいさいかぎを手にとつて、ぶるぶる、ふるえながら、小ベヤの戸をあけました。

窓がしまつていたので、はじめはなんにも見えませんでした。そのうち、だんだん、くらやみに目がなれてくると、どうでしょう、その床の上には、いっばい血のかたまりがこびりついていて、五六人の女の死がいを、ならべてかべに立てかけたのが、血の上にうつつて見えていました。これは、みんな青ひげが、ひとりひとり、けっこん結婚したあとで殺してしまつた女たちの死がいでし

た。これを見たたん、奥がたは、あつといたなり、息がとまって、からだがすくんで動けなくなりました。そうして、戸のかぎ穴からぬいて、手にもつていたかぎが、いつか、すべり落ちたのも知らずにいたくらいです。

しばらくして、やっとわれにかえると、奥がたはあわてて、かぎを拾いあげて、戸をしめて、いそいで二階の居間にかけてかえると、ほっと息をつきました。でも、いつまでも胸がわくわくして、しようき正気がつかないようでした。

見ると、かぎに血がついているので、二三ど、それをふいてとろうとしましたが、どうしても血がとれません。水につけて洗つてみても、せっけんとみがき砂をつけて、といしで、ごしごし、

こすってみても、いっこうにしるしがみえません。血のついたあとは、いよいよ、こくなるばかりでした。それもそのはず、このかぎは魔法まほうのかぎだったのです。ですから、おもてがわのほうの血を落したかとおもうと、それはうらがわに、いつか、よけいこく、にじみ出していました。

三

すると、その日の夕方、青ひげが、ひよっこり、うちへかえって来ました。それは、まだむこうまで行かないうち、とちゅうで、用むきが、つごうよく片づいた、という知らせを聞いたからだど、

青ひげは話しました。だしぬけにかえつてこられたとき、奥がたは、ぎよつとしましたが、いっしょうけんめい、うれしそうな顔をして見せていました。

さて、そのあくる朝、青ひげは、さつそく、奥がたに、あずけたかぎをお出しといたしました。そういわれて、奥がたがかぎを出したとき、その手のふるえようといったらありませんでしたから、青ひげは、すぐとかんづいてしまいました。

「おや。」と、青ひげはいいました。「小べやのかぎがひとつないぞ。」

「じゃあ、きつと、あちらのつくえの上におきわすれたのでしよう。」と、奥がたはこたえました。

「すぐ持つてこい。」と、青ひげは、おこった声を出しました。

五六ど、あちらへ行ったり、こちらへ行ったり、まごまごしたあとで、奥がたは、しぶしぶかぎを出しました。青ひげは、かぎを受けとると、こわい目をして、じつとながめていましたが、

「このかぎの血はどうしたのだ。」といいました。

「知りません。」と、泣くような声でこたえた奥がたの顔は、死人よりも青ざめていました。

「なに、知りませんだと。」と、青ひげはいいました。「おれはよく知っているよ。おまえはよくもおもいきつて、小べやの中にはいったな。えらいどきようだ。よし、そんなにはいりたければ、あそこへはいれ、はいつて、そこにいる奥さんたちのなかまにな

れ。」

こういわれると、奥がたは、いきなり夫の足もとにつつぷして、いかにもまごころから、くいあらためたようすで、もうけっして、おいしいつけにはそむきませんから、と行って、わびました。このうえもなく美しい人の、このうえもなく悲しいすがたを見ては、岩でもとろけ出したでしょう。けれど、この青ひげの心は、岩よりも、かねよりも、かたかつたのでございます。

「奥さん、あなたは死ななければならぬ。今すぐに。」と、青ひげはいいました。

「わたくし、どうしても死ななければならぬのでしたら。」と、奥がたはこたえて、目にいっぱい涙をうかべて、夫の顔を見まし

た。「せめてしばらく、おいのりをするあいだだけ、待ってくださいますし。」

「しかたがない、七分半だけ待つてやる。だがそれから、一秒もびようおくれることはならないぞ。」と、青ひげはいいました。

ひとりになると、奥がたは、女のきょうだいの名を呼びました。

「アンヌねえさま（アンヌというのは、きょうだいのなまえでした。）アンヌねえさま、後生ごしょうです、塔とうのてっぺんまであがつて、

にいさまたちが、まだおいでにならないか見てください。にいさまたちは、きょう、たずねてくださるやくそくになっているのです。見えたら、大いそぎでくるように、合図あいずをしてください。」

アンヌねえさまは、すぐ塔のてっぺんまであがつて行きました。

半分きちがいのようになった奥がたは、かわいそうに、しじゅう、さけびつづけていました。

「アン又ねえさま、アン又ねえさま、まだなにもこないの。」
すると、アン又ねえさまはいいました。

「日が照^てって、ほこりが立っているだけですよ。草が青く光っているだけですよ。」

そのうちに青ひげが、大きな剣^{けん}をぬいて手にもって、ありったけのわれがね声^{ごえ}を出して、どなりたてました。

「すぐおりにこい。おりにこないと、おれのほうからあがって行くぞ。」

「もうちよつと待っててください、後^ご生^{しょう}ですから。」と、奥がた

はいいました。そうして、ごくひくい声で、

「アン又ねえさま、アン又ねえさま、まだなにも見えないの。」
と、さげびました。

アン又ねえさまはこたえました。

「日が照^てつて、ほこりが立っているだけですよ。草が青く光っているだけですよ。」

「早くおりてこい。」と、青ひげはさげびました。「おりてこないと、あがつて行くぞ。」

「今まいります。」と、奥がたはこたえました。

そうして、そのあとで、「アン又ねえさま、まだなにも見えないの。」と、さげびました。

「ああ。でも、大きな砂けむりが、こちらのほうにむかって、立っていますよ。」と、アン又ねえさまはこたえました。

「それはきつと、にいさまたちでしょう。」

「おやおや、そうではない。ひつじのむれですよ。」

「こら、おりてこないか、きさま。」と、青ひげはさげびました。

「今すぐに。」と、奥がたはいいました。そうして、そのあとで、

「アン又ねえさま、アン又ねえさま、まだ、だあれもこなくつて

。」

「ああ、ふたり馬に乗った人がやってくるわ。けれど、まだずいぶん遠いのよ。」

「ああ、ありがたい。」と、奥がたは、うれしそうにいました。

「それこそ、にいさまたちですよ。わたし、にいさまたちに、いそいでくるように合あ図いしましょう。」

そのとき、青ひげは、家ごとふるえるほどの大ごえでどなりました。奥がたは、しおしお、下へおりて行きました。涙をいっばい目にためて、かみの毛を肩にたらし、夫おとこの足もとにつつぶしました。

「今さらどうなるものか。」と、青ひげはあざわらいました。

「はやく死ね。」

こういって、片手に、奥がたのかみの毛をつかみながら、片手で、剣けんをふりあげて、首をはねようと思いました。おくがたは、夫のほうをふりむいて、今にもたえ入りそうな目つきで、ほんのし

ばらく、身づくろいするあいだ、待つてくださいいと、たのみました。

青ひげはこういつて、劍をふりあげました。

「ならん、ならん。神さまにまかせてしまえ。」

そのとたん、おもての戸に、ドンと、はげしくぶつかる音があったので、青ひげはおもわず、ぎよつとして手をとめました。とたんに、戸があいたとおもうと、すぐ騎兵きへいがふたりはいつて来て、いきなり、青ひげにむかつて来ました。これは奥がたの兄弟きょうだいで、ひとりは竜騎兵りゆうきへい、ひとりは近衛騎兵このえきへいだということを、青ひげはすぐと知りました。そこで、あわてて逃げ出そうとしましたが、兄弟はもう、うしろから追いついて、青ひげが、くつぬぎの

石に足をかけようとするところを、どうなか 胴中をひとつきつきさして、ころしてしまいました。

でもそのときには、もう奥がたも気が遠くなつて、死んだようになつていましたから、とても立ちあがつて、きょうだい 兄弟たちをむか迎えるきりよく気力はありませんでした。

さて、青ひげには、あとつぎの子がありませんでしたから、その財産ざいさんはのこらず、奥がたのものになりました。奥がたはそれを、ねえさまやにいさまたちに分けてあげました。

ものめずらしがり、それはいつでも心をひく、かるいたのしみですが、いちど、それがみたされると、もうすぐこうかい後悔が、代つ

てやってきて、そのため高い代価^{だいか}を払わなくてはなりません。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店

1950（昭和25）年5月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青ひげ

ペロー Perrault

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 楠山正雄訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>